

Twiddle Muff (認知症マフ) 活用ケアガイド

ケース&グループ編

マフは、認知症の人とケアする人の優しさを引き出して、こころをつなぎます。
あなたのこころを編んでケアに活用してみませんか？

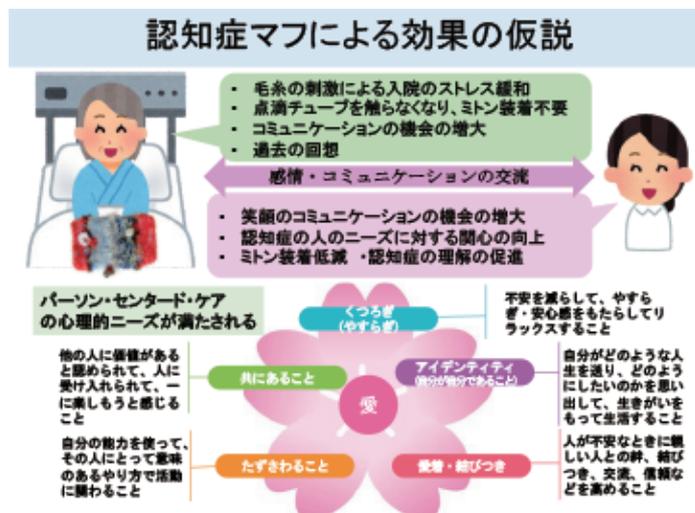
「ケース&グループ編」ではマフの効果や活用のための展開について考えよう！

♥ Twiddle muff(認知症マフ)とは？

マフは筒状のカラフルにデザインされたニット製品で、英国ではtwiddle muffと呼ばれています。認知症の人の落ち着かない手を穏やかに温かく保ち、触覚や視覚という感覚を用いたケア実践に活用されています。マフの内外には、ボタンやリボンなど様々なアクセサリーが付けられています。認知症の人が自由に筒型の部分に片手あるいは両手を入れたり、マフの外表面や内面、アクセサリー等を触ったりと感覚を用いた関わりができ、心身の緊張を解きほぐし、安心感が得られます。

♥ マフを活用したケアの効果

マフは感覚刺激の少ない人の触覚を用いたケアとして地域、高齢者施設、病院等様々な場で活用されています。手の保温による心の落ち着き、神経系のリラックス、血流、循環の促進、筋緊張の軽減、自律神経の回復、リラックスした状態で手指を動かすことによる脳の活性化なども期待されます。認知症の人がマフを提供する人や周囲の人とともにマフと一緒に楽しむことで交流が生まれ、昔の回想が引き起こされたりします。



Twiddle Muff (認知症マフ)に関する活用基準、作成方法、感染症対策等は、**Twiddle Muff (認知症マフ)活用ケアガイドVer.2**をご覧ください。

※下記の二次元バーコードから「浜松医科大学老年看護学」の「開発した実践ガイド」が開きます。その中から「Twiddle Muff (認知症マフ)活用ケアガイドVer2」を選んで頂くと、各自でご自由にダウンロードできます。



<https://onl.tw/6ihdZNT>



♥ 施設におけるマフ導入のポイント

【マフ導入における組織の理解と協力体制の構築】

新たに認知症マフを組織や施設に導入する場合、所属先の理解や協力は欠かせません。最初は、**Twiddle Muff (認知マフ)活用ケアガイドVer.2**を用いて、マフについて理解を深め、活用する目的を明確にして、所属長や患者・家族へも説明をするよいでしょう。マフを渡して終わりではなく、スタッフに正しい活用方法を理解してもらい、目的に添って適切にケアに活用できるよう、活用する人の反応も確認しながらスタッフと活用目的・方法・効果について対話を重ねていきます。

【効果の検証】

協力体制を整えた後、事例からマフを活用したケア効果の分析を始めてみましょう。利用者の満足、関心、楽しみという肯定的な感情反応の変化、身体拘束軽減時間の延長などを確認し、スタッフと評価することでより良い活用推進のきっかけに繋がります。

【マフ作成の体制】

手芸好きなスタッフと共にマフを編んでいた時、マフの効果が新聞等に掲載されマフを活用したい患者が増大する一方でマフが不足しました。朝日新聞厚生文化事業団主催のワークショップ参加者から地域の編み物サークルやボランティアサークルにマフ制作の輪が拡大し、市民からも楽しんでマフ制作が続けられ、病院に寄付されることでマフ不足も解消されました。理解者や協力者と共に導入していくと良いでしょう。(富樫千代美)



Smile Muffの作品

♥ マフを活用したケース

Case
01

介護の拒否の強い人に音符や人形のついたマフを活用することで
笑顔やコミュニケーションが増加!【介護老人保健施設】

90歳代

女性

要介護3

脳血管性認知症

車椅子使用

基本動作は見守り ~ 一部介助

(三方原ベテルホーム 國分千津子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

人形や音符の付いたマフから歌を歌い、回想が引き出され“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、笑顔を引き出すことができた。スタッフや高齢者とのコミュニケーションが増えて“共にあること”のニーズを満たして穏やかに過ごすことができた。

活用前の状況

入所当初は易怒性があり精神的に不安定なことが多かったが、薬剤調整後は歌詞カードを見ながら歌を歌うなど、日中は穏やかに過ごす時間が増えていた。しかし、夕方頃より帰宅願望が出現し、夜間帯には被害妄想や強い介護拒否、暴言、暴力が見られた。



活用理由

精神的な波が大きく、穏やかな時と易怒的になる時があるため、苛立つことなく穏やかな気持ちで一日を過ごすことで日中の活動性の向上を図り、夜間の睡眠時間を確保ができるようマフの導入を試みた。

活用後の変化

不穏時や表情が険しい際にマフを渡し、一緒にマフの人形を見ながら話をする時間を設けた。人形を見て「この子の名前はくーちゃん、音符がついているから歌を歌っているのだらうね」と笑顔になり、自ら歌い出したり、となりの利用者に「あなたもくーちゃんを抱っこしてあげて」と手渡すなどの様子が見られ、他の利用者とのやり取りも増えた。

ケアに活用した人の感想

マフの活用を通して、スタッフのみならず高齢者同士の交流を深めることができたことは画期的であった。また趣味である歌に着目し、数あるマフの中から音符のついたマフを選択したことで触発され歌を歌い始めたり、人形に話し掛けたりと楽しそうにマフを触っている様子から、趣味に合わせた装飾の有効性を感じた。今後は夜間入床時にもマフを試み、夜間帯の活用方法を検討したい。

Case
02

野球のグローブや球のついたマフを無気力な人に活用することで
自発性や意欲の向上!【介護老人保健施設】

90歳代

男性

要介護5

脳血管性認知症

車椅子移動

趣味はスポーツ観戦

(三方原ベテルホーム 國分千津子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

野球のグローブと球が装飾されたマフから、回想が引き出され“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、笑顔を引き出すことができた。スタッフや高齢者同士のコミュニケーションが増えて“共にあること”のニーズを満たして自発性や意欲の向上が見られた。

活用前の状況

脳梗塞後遺症で、自発性低下、発語困難がみられていることもあり、他者との交流は少ない。家族写真を自分でめくって見ていることがある程度で、活動らしい活動は行っていなかった。危険認知の低下があり、一人での立ち上がりが頻回で転倒歴多数。



活用理由

他者とのコミュニケーションが困難なために1人でぼんやり過ごしていた。突然の立ち上がりも多く、転倒リスクが大変高かったため、興味を引くものを探るためにマフを活用した。

活用後の変化

趣味である野球のグローブと球が装飾されたマフを活用したこともあり、自らマフを手に取り球をグローブに投げ込むなど一人で遊ぶ様子が見られた。マフを使ってスタッフが球を投げ、本人が楽しそうにキャッチするといった場面も見られ、楽しく交流する時間が増えて、笑顔がみられるようになった。

ケアに活用した人の感想

スポーツ観戦が趣味で元々野球が好きの人に、野球のグローブと球の装飾が施されたマフを活用することで1人遊び、スタッフとの遊びの時間を持つようになった。交流時間が増えることで、笑顔も増え、同時に自発性や意欲の向上が見られた。このマフが遊び心を思い出すきっかけとなったのだらうと考える。また活動時間を持てるようになったことで一人での動き出しが減り、転倒が減少した。今後は夜間入床時の活用も試み、オムツ外しの減少に対する効果を検討していきたい。

Case 03

視力障害があり、悲嘆が強く自分の世界に閉じこもっていた人が マフの柔らかな刺激からコミュニケーションが増加！【特別養護老人ホーム】

80歳代

女性

要介護 4

白内障・アルツハイマー型認知症

(くるま乃 相馬房嘉)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

視力障害があり、悲嘆が強く自分の世界に閉じこもっていた人にマフの柔らかな刺激から“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズが満たされ、スタッフとのコミュニケーションが増えて“共にあること”のニーズを満たして笑顔が増えた。

活用前の状況

同じユニットに入所していた夫が昨年ご逝去、以後、夕方になると「じいさん、なぜ自分を置いていったんだ」「悲しい、死にたい」と大声で叫び落ち着かない。スタッフが声をかけても自分の世界に閉じこもり、コミュニケーションが取れなくなる。

活用理由

耳は聞こえるが目がほとんど見えないため、視覚を使ったコミュニケーションが取れず、対応に職員も苦慮した。マフの存在を職員がFacebookで知り、マフに触ることで精神的にポジティブな結果を期待して活用した。

活用後の変化

触覚に訴えるため、マフの素材は通常の毛糸ではなく肌触りの良いバスタオルを円筒状に縫い、内側の飾りも生地も触り心地のよいツルツルした布、筒の中にボール状のものを入れ、手で揉めるように工夫した。初めは不思議そうな様子であったが、そのうちに「昔飼っていた犬をなでているみたいだ!」と言って、落ち着かなくなる回数が著しく減った。マフの両側からスタッフと本人で手を入れて中で握手をしたりすると喜ばれ、コミュニケーションツールとして活用できた。

ケアに活用した人の感想

「触っていると昔飼っていた犬を思い出す」「触っていると気持ちがいい」「(スタッフと)マフの中で手をつなぐとなんか気恥ずかしいけど嬉しい」と話す。

編んだ人の感想

スタッフの母親75歳が動画や写真を見て見様見真似で作成した。触り心地を重視するとのことなので、タオル生地やサテン生地には気がつけた。マフの大きさも、小さすぎず大きすぎず、気持ち良く使える大きさになるように何度か微調整してより使いやすいように気を配ったが、作っていて楽しかった。機会があれば実際に使っているところも見てみたい。



①A様 80歳代後半女性(特養入所)
白内障で目が見えづらい。
ご主人を亡くし気持ちが落ち込んでいる。

Case 04

猫の好きな人に猫のマフの活用で独語だけの会話から 意味のあるコミュニケーションができるようになった！【特別養護老人ホーム】

90歳代

女性

要介護 3

アルツハイマー型認知症

(西山の杜 河合智子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

マフを活用することで、好きな猫を思い出して“愛着・結びつき”のニーズを満たして、穏やかになって安心して人と交流することで意味のあるコミュニケーションができるようになった。

活用前の状況

ウェルニッケ失語のような症状があり、静かに過ごしていても時々独り言が出る。背景を知るスタッフから猫が好きだと聞き、猫のマスコットが付いたマフを見たら、喜んでくれるのではないかとプレゼントする側もワクワクした気持ちで渡した。

活用後の変化

マフに片手を入れ、もう片方は猫のマスコットやマフをなでるととても嬉しそうな表情。さらに効果として、状況にあった意味のある発語やコミュニケーションができた。

ケアに活用した人の感想

認知症の方に関わっている中で、必要なことは“愛”だと思っている。ご本人の尊厳を守りたい、優しく手を握ってあげたい、そんな思いをマフに託した。

編んだ人の感想

同施設のデイサービスの高齢者やスタッフが特別養護老人ホーム入居者にマフを編む事が役割となり、誰かに頼られることで居場所ができ、帰宅願望の軽減、デイサービスに通う意欲、穏やかな気持ち、回想や会話の増加等、マフを編む側にも良い効果が見られた。



マフについた猫に頼りしている様子

Case 05

ミトン低減・心身機能の改善のケアを目指して 転院後もマフを活用したケアの継続！【病院】

70歳代

男性

要介護 5

レビー小体型認知症

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

ミトンから解放されることで、身体的苦痛が緩和されて、“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、安心して療養生活を過ごすことができた。マフの活用で心身機能の改善も積極的に行われた。

活用前の状況

肺炎後、身体機能・嚥下機能低下から食事摂取困難となり、経鼻経管栄養法(鼻チューブ)を挿入して、自己抜去予防のためにミトンを両手に装着。覚醒レベルや認知機能変動し、ミトン解除しても左手の挙上あり、鼻チューブ自己抜去のリスクが高い。

活用理由

自己抜去の行動はないために、午前中のみミトン解除。鼻チューブ固定の位置や固定を強化した。マフを触ってもらい、大きめの毛糸の玉を握ってもらった。

活用後の変化

経管栄養以外の時間はマフのみを使用し、覚醒状態の改善を目指して口腔ケアや車椅子離床など積極的に進めることで、日中は車椅子移乗、経管栄養中もマフのみで穏やかに過ごした。

ケアに活用した人の感想

スタッフからもマフに関して「これいいですね。何も無いより安心します」「腕も上がらないし、マフだけでも夜も大丈夫なのでは？」と積極的に受け入れてもらえた。療養病院に転院となったが、ご家族が転院先にマフを持参し、転院先でも身体拘束は行われずにマフのみで過ごしていると連絡があった。

編んだ人の感想

ご本人が喜んでくれて、身体拘束解除ができてスタッフが興味・関心を持ってくれるのが嬉しい。もっともっとマフを知ってもらうために院内通信にもマフによる身体拘束解除の成功事例として紹介している。

Case 06

入院による不安や孤独感の強い認知症患者に マフを活用して笑顔や会話が増加！【病院】

80歳代

女性

要介護 3

アルツハイマー型認知症

右大腿骨頭部骨折

人工骨頭置換術後

(磐田市立総合病院 田森智美)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

マフを活用することで、家族がいないことによる不安や孤独感による“愛着・結びつき”のニーズや“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たし、回想が促されて、スタッフとの会話が増え、穏やかに生活することができた。

活用前の状況

終日そわそわと落ち着かず、家族の名前を呼んでいた。「○○はどこ？寂しい」と言葉にすることもあった。夜間も不眠。訪問回数を増やし、話をしたり一緒にアクティビティを行ったりするなどケアを工夫したが変化なし。

活用理由

家族と会えないことで、寂しさ・孤独感・不安を感じ、落ち着きがなく不眠にもつながっているのではないかと考えた。マフは『手を穏やかに温かく保ち触覚や視覚を用いた暖かい刺激で心が落ち着く』と言われているため、五感にアプローチし、寂しさの緩和を目的にマフを活用した。

活用後の変化

マフのアクセサリーをなで、「可愛いね」と頬擦りした。マフを見て「これ可愛いでしょ」とスタッフに見せたり、編み物が好きだったと話してくれたりすることもあり、**笑顔や会話が増えた。家族の名前を呼ぶ回数が減少。**リハビリテーションや検査にもマフを持参し、夜間もマフに手を入れ、その手を顔の横に置き、マフと一緒に眠る。

ケアに活用した人の感想

マフがその人の生活の一部になっていく過程を一緒に体験することができた。**編み物をしてきた頃の記憶**がよみがえり、輝いていた時代の話をする中で、これまでの生活史やその人らしさをより知る機会になった。マフはコミュニケーションを促進するツールにもなる。

編んだ人の感想

患者さんの目にどう映るのか、どんな色が好きか、安全で面白い仕掛けはないかを考えながら作った。**目標は、持っている周囲のスタッフから声を掛けられて本人との会話が広がるマフ。**モフモフのしっぽ、ひまわりのポケットと葉っぱ、握りやすい大きさのマスコット、ドーナツ、三つ編みができる紐など、作っている工程全部が好き。お気に入りのマフになるよう、これからもどんどん作りたい。



Case 07

点滴自己抜去の多い人にマフを活用することで 自己抜去を低減して笑顔を引き出す！【病院】

80歳代 女性 要介護4 重度認知症 てんかん

(中東遠総合医療センター 寺田千尋)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

不安や苦痛が緩和されて、“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、安心して療養生活を過ごし、マフを持つことで、スタッフの声掛けが増えて“共にあること”のニーズを満たすことができた。

活用前の 状況

てんかんで入院。点滴は包帯を巻き、モニターは背部につけるなど工夫はしていたが、点滴を手探りで引き寄せて1日に何度も自己抜去していた。苦痛や不安などのストレスから手に触れる物を手繰り寄せるのではないかと考えた。マフによって安心感が得られてライン類の代わりに柔らかなマフのぬくもりを感じてもらうことで、自己抜去の予防ができると考えた。



活用後の 変化

最初は興味を示さなかったが、訪室のたびにマフを持ってもらったり、手を入れてもらったりして、触れてもらう機会を増やした。すると自ら手を入れたり、マフのリボンやマスコットを触ったりする姿がみられ、移動時もマフを持つなど常に身に着けていた。以前に比べて、モニターや点滴の自己抜去の回数は減少した。モニターや点滴の装着終了後も、マフを常に身に着け、マフについて可愛い・素敵と褒められると微笑む姿も見られた。

ケアに 活用した 人の感想

最初はあまり興味を示してくれなかったが、繰り返しマフに触れてもらう機会を作って触ってもらった。徐々に大切そうに身に着け、移動時にも持ってくれていた。マフが安心感につながったようだと感じた。嬉しそうにほほ笑む姿を見ることで、マフを活用してよかったと思った。自己抜去の回数は徐々に減少した。

編んだ人の 感想

思っていたよりも簡単に編むことができた。編んでいる最中は毛糸のぬくもりを感じ、心が落ち着いた。そして、編みあがるまでのアクセサリやリボンをどう付けようかなど考えながら作るのも楽しかった。マフを活用してもらうことで身体拘束なく、少しでも認知症の人が穏やかに安心して過ごすことができればと思ってマフを編んだ。

Case 08

点滴自己抜去のためにミトン装着していた人にマフを活用することで、 ミトン装着解除から笑顔が増加！【病院】

80歳代 女性 要介護3 日常生活動作はほぼ全介助 胆管癌

(順天堂大学医学部附属静岡病院 古屋曜子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

マフを持つことで、スタッフの声掛けが増えて“共にあること”のニーズを満たすことで笑顔が増えた。

活用前の 状況

胆管癌による黄疸にて入院。抗生剤投与による保存療法。日中はほぼ寝たきりで過ごし、表情は固く言葉も少ない状態。看護師の問いかけにも反応が鈍く、視線がなかなか合わないことが多かった。夜間眠れずに「お父さん」と大きな声で呼び、点滴自己抜去するために両手にミトン装着となった。



活用の理由

点滴のみでミトン装着されているためになんとか身体拘束低減できないか病棟スタッフが検討して、マフの存在を知り、スタッフから使用希望の問い合わせがあった。

活用後の 変化

マフを見て笑顔を見せるようになり、看護師とのコミュニケーションをとるようになった。また、点滴を気にする様子が減って自己抜去を防ぐことができた。看護師もマフに興味を持って頻回に訪室することで笑顔のコミュニケーションが増えた。

ケアに 活用した 人の感想

急性期病院では、看護師たちは身体拘束に対してストレスを感じていることが多い。マフを使用したことで身体拘束を解除してみるきっかけとなった。マフの活用で患者と看護師のコミュニケーションが増えることが一番の効果ではないかと考える。

編んだ人の感想

自分の編んだマフで身体拘束を外すことができたと聞いて、役に立つことができて嬉しい。

Case 09

マフを活用してミトン装着解除、

暖かな毛糸の刺激から愛犬を回想して話をすることで穏やかになった!【病院】

70歳代

女性

アルツハイマー型認知症とレビー小体型認知症の混合型認知症

(浜北さくら台病院 澤木香永子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

視力障害があり、悲嘆が強く自分の世界に閉じこもっていた人にマフの柔らかな刺激から“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズが満たされ、スタッフとのコミュニケーションが増えて“共にあること”のニーズを満たして笑顔が増えた。

活用前の状況

介護抵抗が強く、自宅介護困難にて入院。嚥下困難のために鼻チューブを挿入していた。幻視、大声での独語、興奮、易怒性が見られ、何度も鼻チューブの自己抜去を繰り返したため、両手にミトン装着となった。

活用理由

入院当初は、可愛がっていた犬のことを話し、豪快に笑い、歌を歌い、スタッフと楽しそうに会話をしていたが、鼻チューブ挿入、ミトン装着となつてから、笑顔が消え易怒性が顕著となった。スタッフから「可哀そう。どうかかしてあげたい。」という言葉が聞かれ、マフを提案した。

活用後の変化

綺麗な物、可愛い物が大好きで、マフを見せると笑顔になって、手を伸ばして興味を持った様子であった。マフを渡すと自ら腕を通したり、なでたりし、「家にいるミイちゃんみたい。」と、愛犬を思い出した様子であった。それからは、ミトン解除しマフだけで過ごし、夜間も睡眠できた。マフを通しスタッフとの会話が増え、以前のように笑顔を見せてくれるようになった。

ケアに活用した人の感想

マフに愛着が湧いて自分の物となり、安心感を得ていた。ミトン解除によりストレスが軽減。マフを通してスタッフがコミュニケーションを密にとる姿が見られた。マフは本人・スタッフともに笑顔が増え穏やかに過ごすことができるコミュニケーションツールとなる。易怒性が強い人、落ち着かない人にマフを活用して身体拘束しない認知症ケアを実現していきたい。

編んだ人の感想

生活環境、生活史を知ったうえでその人に合わせたマフの活用ができると、マフに愛着を持って穏やかに生活できる。マフによりミトン解除し、穏やかな笑顔に包まれた生活を実現していきたい。



Case 10

目を閉じて「寒い」としか言わない人に鯛のマフを活用することで回想から会話や笑顔が増加!【病院】

80歳代

男性

要介護4

脳梗塞

障害老人の日常生活自立度C2

(公立七戸病院 久保田由美子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

手が暖まることで“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、安心して療養生活を過ごし、マフを持つことでスタッフの声掛けが増えて“共にあること”のニーズを満たすことができた。

活用前の状況

簡単な発語は可能で「寒い、寒い」と言い、家族写真を見せても閉眼している。また、おむついじりがありつなぎ服(介護寝巻)を着用していた。「寒い」と訴えた際に「これは手を温める物ですよ。手を入れてみませんか」と声を掛けたところ、自ら手をマフに入れるようになった。

活用後の変化

マフに手を入れた時、家族の写真を見せると名前を覚えてくれたり、マフに付いている魚を見て「魚釣りによく行ったんだ」と話しをするようになった。マフを活用してからおむつを触ることが少なくなり、つなぎ服から普通の病衣にすると、排便を伝えてくれるようになった。生活史に関連したマフを使用することで、会話が弾み穏やかに療養されマフと共に退院した。

ケアに活用した人の感想

マフに生活史に関連した物や肌触りの良い物を付けることで、視覚と触覚から刺激を受け、語彙が増加するなど、コミュニケーションツールの一助になる。一緒にマフを見たり触れたりしながら語り合うことで認知症の方も提供する側もお互いが癒され安心して心地よく過ごせた。1人の認知症の人と向き合い、ゆったりとケアができた。

編んだ人の感想

編物はできないけど、裁縫が特技なので、これまで捨てられなかった昔のハギレを使って作った物が、患者さんに喜ばれて、高齢の私でも少しは人の役にたつことができ、とても嬉しく感じている。ご本人に“めでたい(鯛)”ことがありますように…(七戸町老人クラブ代表:斎藤)



Case 11

激しい怒りを表出する人にサッカーボールの付いたマフを活用することで笑顔の会話を引き出す！【病院】

70歳代

男性

前頭側頭型認知症

肺炎

(聖隷三方原病院 前田香)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

サッカーボールから回想が引き出され“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、笑顔を引き出すことができた。マフを持つことでスタッフの声掛けが増えて“共にあること”のニーズを満たして治療に協力できることができた。



活用前の状況

易怒性や暴力行為があり、スタッフが近づくだけで怒りの表情を表していた。

活用理由

近づくことでスタッフが恐怖を感じるような発言や行動が続いていた。お互いに苦しい状況であると判断し、何か一緒にできることはないかと考えた。医療的処置を行う必要があってもいきなり説明を開始するのではなく、触れないで心理的安全性の担保ができる何かがないだろうか?と考え主治医と共有後、マフを活用した。

活用後の変化

身体的治療が進み、苦痛が軽減していた。マフを見せると手を伸ばしサッカーボールに触れて笑みを浮かべた。サッカーに関する話を進めると入院後始めてみる笑顔となり、他の看護師が驚き自然にベッドサイドに集まり、本人に話しかけていた。理学療法士ともマフについて共有し、リハビリテーション時にマフを持つことで拒否的行動がなくなり、座位までとることができた。

ケアに活用した人の感想

急性期病院で患者は痛みや我慢、努力などの苦痛の多い体験が続くと感じている。看護師は良くなってもらいたいと思っても、患者からすれば痛みを与える人(関わりたくない人)と認識されているのかもしれない。これ自体がお互い苦しい状況であると考えている。ここに、マフという共有できる媒体が入ることで「あたたかさ」「安心」を感じ、人と人がつながるようになるのではないかと感じている。マフが認知症を治癒させるものではないが、人と人の対話の促進をさせているのではないかと感じている。

Case 12

マフの柔らかな刺激を感じることで痛みが緩和してコミュニケーションや笑顔が増加！【病院】

80歳代

女性

要介護2

認知症

大腿骨頸部骨折にて緊急入院

(池本理恵)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

マフの柔らかな刺激から“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、痛みの緩和、スタッフとのコミュニケーションが増えて“共にあること”のニーズを満たし、笑顔が増えた。

活用前の状況

緊急入院のため、環境の変化、骨折による痛み戸惑い大きな声で家族を呼んだり、なぜ足が痛いのかを繰り返して聞いていた。

活用理由

入院によりコミュニケーションが減少し、寂しさが生じることや緊急入院による環境の変化による混乱、刺激の減少による認知症の進行の可能性があるため、マフの活用を考えた。また、マフの飾りを握っていることで痛みが緩和するのではないかと考えた。

活用後の変化

マフの毛糸玉を体位変換時に強く握ってもらうようにした。マフを使用する前に比べ大きな声は出さなくなった。術後、マフを用いたコミュニケーションを図った際、笑顔が見られ、そしてマフについている人形をなでるように触っていた。

ケアに活用した人の感想

マフを用いてコミュニケーションをとるようになってから笑顔が増えた。また、短期記憶障害があるが、マフに関しては「こう使うんだよね」とマフの中に手を入れたりしてカラフルなマフのことは覚えていた。

編んだ人の感想

初めは自分でマフを編むことはできないと思っていたが、勧められチャレンジした。母に編み方を教えてもらい母とも優しい時間を共有することができた。その後、自分が編んだマフを初めて本人に手渡した時に見られた笑顔を見て、マフを編んでよかったと感じた。

Case 13

攻撃性のある人にマフの柔らかな刺激を感じることで 会話が豊かになって笑顔が増加！【病院】

80歳代

女性

重度認知症

寝たきり

尿路感染症

中心静脈栄養療法

(聖路加国際病院 齋藤尚子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

攻撃性のある人にマフの柔らかな刺激から“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、痛みの緩和、スタッフとのコミュニケーションが増えて“共にあること”のニーズを満たして笑顔が増えた。

活用前の 状況

中心静脈栄養療法の自己抜去予防のために、両手にミトンを装着。簡単な言葉の理解はできるが、医療者が処置を行う際に、手が出たり爪を立てたり、「ばか」「やめろ」と攻撃性があった。

活用の理由

医療者が首にかけているIDカードをいつも気にして掴んで離さないためにマフに注意を向けられるのではないかと考えた。

活用後の 変化

マフを渡すと、腕にはめた感触を確かめるように動かしてみたり、手に触れたアクセサリーを掴んではなさない様子が見られた。「プレゼントですよ」「いい色ですね」「あったかそう」などポジティブな言葉を掛け続けた。マフをはめている間は「連れて行って」「食べたい」など普段とは違う多様な言葉が聞かれたり、穏やかな表情が見られた。

ケアに 活用した 人の感想

同じ手につけるものでもマフの柔らかさや暖かさからは、ミトンとは全く異なる意味合いが伝わることを実感した。触覚だけでなくマフをきっかけに、視覚や聴覚にポジティブなメッセージを届けることもできる。苦痛や不快な刺激の多い入院生活の中で、五感を通して心地よい快の刺激を受け取ったことで、奥底に沈んでいた豊かな表情や言葉を表出できたのではないかと感じた。注意障害や言語的なコミュニケーションが困難な人にマフは心地よい刺激を用いたケアとなった。

編んだ人の 感想

編み物が趣味の私は、マフ作成者を募集された時、喜んで手を挙げた。いつも心電図モニターやルートをいじってしまう人に対して、付け直し挿し直ししかできなかった。しかし、マフをお渡しすることで、明らかにそのような行動が減った。編みがいを感じ、自分が編んだマフで穏やかにすごせるサポートができた嬉しさを感じ、これからも編み続けたい。

Case 14

身体機能の低下に対するストレスを緩和し、 自信や自発性を引き出すマフ！【病院】

80歳代

女性

大動脈解離

入院前までADL自立

独居

介護保険未申請

(袴田良子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

マフを通しての交流から“共にあること”のニーズを満たして、身体機能が低下しても価値のある人であることを感じて安心して療養生活を過ごすことができた。

活用の理由

大動脈解離のため緊急入院。創部の炎症などあり長期間高度治療室入院し、一般病棟に転棟後、ADLの回復が進まなかった。会話をすると、認知機能に問題はなく、現状についてもしっかりと理解されていた。話しを伺うと「わかっているのよ。ご飯を食べないといけないこと・・・でもね。食べられないの」と長期入院の結果、ADL低下等の身体状況の変化に疲弊している様子、頑張っていることを認めて自信をつけてもらえればと考えマフを渡した。

活用後の 変化

好きな犬や花のものの中から魚のモチーフを自ら選び笑顔がみられていた。その後、経過は良好、自発的な会話や行動が見られるようになった。

ケアに 活用した 人の感想

マフを渡してみて、渡したときの笑顔や「嬉しい」「大切に使う」という声が聞けて嬉しい。使用方法を間違えていることもあったが、その都度スタッフへマフの活用方法を説明することで正しく使用することができた。スタッフもマフの効果を実感し、スタッフの方から「〇〇さんにマフを渡したい」と提案が出てくるようになった。

編んだ人の 感想

マフを編んでいる時、このマフはどんな人のところへいくのだろうか？喜んでくれるだろうか？など考えながら編んでいた。渡された人がどこにモチーフがあったら気がつくのか？触り心地はどうかなど思いながら編んでいた。編み物初心者なので手の込んだモチーフを付けることができなかったが編み手の思いが伝わるといいなと思いながら編んでいた。



Case 15

エンドオブライフにある患者の不安の緩和や療養生活のパートナーとしてのマフの活用！【病院】

70歳代

女性

要介護5

認知機能低下

糖尿病

視力障害

夫と2人暮らし

寝たきり

(袴田良子)

【パーソン・センタード・ケアにおける意義】

環境の変化や身体的苦痛が緩和されて、“くつろぎ(やすらぎ)”のニーズを満たして、安心して療養生活を過ごし、さらに家族のグリーフケアとして、マフが“愛着・結びつき”のニーズを満たすことができた。

活用前の状況

ショートステイ中に腹痛が出現し、消化管穿孔のため緊急入院。HCU入室時に訪室して対応した。入室直後から**布団をギョッと握りしめ小刻みに手が震えていた**。そっと手を握り話しかけると緊張と不安な思いが伝わってきた。

活用後の変化

マフのぬくもりを通して心地よさを感じるように好きな花のモチーフの付いたマフを渡した。「可愛いわね。嬉しい」と笑顔がみられたが、その後、状態が悪化し亡くなりました。マフを常に胸元において大切にしていたことをご家族に伝えると、ご家族から「持って帰っていいですか」と退院時、両手にマフを抱えながら帰られた。



♥ マフも作成しているグループ

マフのケアの実践は多くのボランティアグループの活動によって支えられています。マフの作成は、マフを使う人・編む人との出会いや発見、感動、そして、喜びを得る活動です。身近な仲間を作り、一緒に活動をしませんか？

グループ 1

ボランティアグループ “一歩の会”

(梅田由紀子)

マフとの出会い

新聞に掲載されていた藤枝の病院の看護師のマフの記事から、浜松医科大学の鈴木みずえ先生のお名前が出ていたので、お手伝いできることはないかと連絡し、資料を送って頂いた。

経過

令和5年3月2日から、体操教室の仲間8人、私の友人、そして唯一若手で、母親を介護中のYさんの合計10名のメンバーでスタートした。

現在の活動状況

活動は月末木曜日の午後から、作品を持ち寄り、それぞれの思いを込めて**メッセージカード**を付けたり、編み方のプチ講習などを行っている。現在5ヶ月が経過したが、アクリルタワシの本等を参考にして試行錯誤の日々である。

マフの魅力

マフの魅力は作り手にも安らぎを与えてくれることである。細切れの時間でも作品として、形を残してくれるので、とても幸せを感じる。また、**社会と繋がっている**と、実感できることも嬉しいことである。

マフを活用する側との連携の希望

一度お渡ししたマフのその後は有効に使っていただけていると信じているが、不具合や手触り、大きさ、重さなどその方々により好みも千差万別であり、どんな点をチェックして、これからの作品に繋げていけば良いのか、ご指摘いただければと思う。現場で実際使ってくださる方、ご家族・ご本人からのご意見などを時折、聞かせて頂いているが、是非辛口のコメントを含め、お教えていただけたらと思う。



グループ 2

ケアマフを編む会

(平田のぶ子)

マフとの出会い

2022年7月、私の編み物教室に通う理学療法士からマフの話聞いた。朝日新聞の記事(2022.7.14)や学会の抄録等を読んだ。現在、編み物講師であるが、看護師としての経験もあり、編んだ作品が医療現場でも役に立つことを知った。

経過

2022年9月、SNSで参加者を募り「ケアマフを編む会」というボランティアグループを立ち上げた。SNSで発信し、オンラインでも編み会を開催。「ケアマフ」という名称は、マフによって編む側も編む楽しみを感じ、誰かの役に立つと思うことで幸せな気持ちになる、心が穏やかになるなど、ケアされることから名付けた。



現在の活動状況

月一回の編み会(会場編み会とオンライン編み会を交互に開催)。会場での編み会もオンライン編み会も全国より参加者が集まり、編み物好きな方、医療や介護の関係者の方、認知症の方のご家族・お知り合いが参加されることも多い。使用する毛糸はSNSで寄付を募り、全国から届いたものである。マフの導入を考えている施設・団体の方が編み会に参加した場合、希望があれば見本のマフ・つける小物・毛糸を差し上げている。

2023年4月、「健脳カフェ」(「アルツククリニック」併設認知症カフェ)にて、ケアマフを編む手編みプログラムを導入。2023年5月、ケアマフを編む際のポイントを動画にしてYouTubeとインスタグラムに配信。

現在、ケアマフの繋がりができた都内病院、埼玉県内の病院などで導入中。マフはさまざまところで使っている可能性がある。ただし、医療現場でも使うので、1番大事なことは『安心・安全』、事故を防ぐためにも注意すべきポイントがあるので、特にそこを伝えている。善意で編んだものが現場で役に立てるように、伝え続ける必要性を感じている。

マフの魅力

好きな編み物で社会貢献ができることが編み手のモチベーションにつながる。活用結果がフィードバックされることで更にモチベーションが上がる。マフを通じて人が繋がることも大きな魅力。

今後、編んでみたい・工夫したいマフ

使う方に合わせてのマフを編みたい。スポーツシリーズ・趣味シリーズ・お仕事シリーズなど編んでいきたい。また、小物はリクエストに合わせて編むようにしたいので、リクエストをどんどん寄せていただきたい。

マフを活用する側との連携の希望

「ケアマフを編む会」は、編む人と使う人(現場)を繋ぐ役割をしたいと思っている。マフも集まってきている。マフが必要な病院・施設・団体があればお問い合わせください。

グループ 3

江東カフェあゆみのマフ作成グループ

(青野幸路)

マフとの出会い

認知症介護者だけでなく、認知症のある人もない人も気軽に交流できる場を作りたく、集うためのツールを探していて、マフに出会った。

経過

浜松市の焙煎屋2階で江東カフェあゆみ(認知症カフェ会場)開催の際にマフを作成している。令和5年3月に民生委員児童委員定例会でマフ作成のグループを紹介。4月から月1回開催。

現在の活動状況

誰でも参加可能。現在、民生委員などが5人程度参加。活用ガイドやその他資料を見ながら相談して作成している。編み物ができない方は、作品に付けるカードを作成するなどそれぞれができる形で参加。地域包括支援センターに編み物ができる職員がおり、制作などのコーディネートをしている。①マフを作成しながら認知症について気軽な会話、②介護者も参加する語りの場、③認知症の人も参加して意見交換、④地域の住民と認知症の人をつなぐ地域包括ケアシステム構築を目指して、認知症の人の穏やかな生活に貢献したい。



マフの魅力

マフの魅力は、私たち自身がマフを手にして、包まれる安心感、穏やかさ、飾り物を眺めたり握ったりすることの楽しさを実感している。まだ、作成したマフを認知症のご本人に活用して頂いていないため、どのようなマフが安全に心地よく使って頂けるか、使用される方に思いを寄せながら作成している。マフのように役に立つ物作りは、やりがいや制作意欲にもつながっている。また、会場では笑い声が満ち、製作者の楽しみや気分転換、仲間づくりになっている。マフは、いろいろな人をつないでいると感じている。

マフを活用する側との連携の希望

始めたばかりで、参加者が少ないが、無理なく長く続けられる会にしたい。まだ作品が少ないが、実際に活用して頂き、感想をお教えてくださいと、今後の活動にもつながると思う。

グループ 4

兵庫県芦屋市ボランティアグループ “Smile Muff”

(市川 章子)

マフとの出会い

以前働いていた高齢者施設で、99歳の方がボランティアで毛糸の帽子を編んでおり、「自分も彼女のように素敵に歳をとりたい」と探した編み物教室の先生が、マフ監修をされている能勢マユミさんだった。先生のSNSよりマフを知った。



経過

2022年9月ボランティアグループ“Smile Muff”立ち上げ。メンバーは高齢者施設や傾聴講座で知り合った有志12名

現在の活動状況

毎月1度、芦屋市社会福祉協議会福祉団体室にて「マフ製作・見学会」の実施。市内高齢者生活支援センター、介護施設、病院、市内編み物ボランティアグループやつどい場との交流や製作協力を得ている。

マフの魅力

認知症高齢者の数が2025年には約700万人、65歳以上の高齢者の約5人に1人に達することが見込まれるなか、マフが普及されることによって製作する人や贈呈される人、そしてその方を取り巻く人々が認知症への理解を深め、「認知症になっても安心して住み続けられる街づくり」の一端を担っていると思う。

今後、編んでみたい・工夫したいマフ

Smile Muffは、「その人お一人のためのマフ作り」を目指して活動していきたい。毎月行われる認知症を患っている方が参加される「認知症を知る会」、介護されている方が集う「認知症の家族の会」などに参加して利用者の声を直に聴いてマフを製作したい。

グループ 5

あむあむ

(中島 珠子)

マフとの出会い

マフを知ったのは、2022年の春ごろ。その後朝日新聞にも掲載され、より詳しく知ることができた。地域で認知症カフェを運営しているの、そこでぜひ活用してみたい!!と、すぐさま動き始め、SNSで知ったマフを編む教室に参加。完成したマフと、新聞やチラシを携えて、認知症カフェに来場する方にも紹介した。編みたい人続出で大反響!!さらには行政にも持ち込み、理解を得た。



経過

認知症カフェでマフの紹介をした結果、とても興味を持たれ、次のカフェ開催日には編んで持参する方もいた。筒だけなら編める人、小物が得意な人、それぞれをつなぐため2022年10月編み部の立上げを決意。運営スタッフとカフェに集う地域の人たちとで、毎月1回楽しく編んでいる。集まったマフと小物の組み合わせは、毎回楽しい悩みになっている。



現在の活動状況

現在は月に一度地域の会館に集まり、家で編んできた物を持ち寄ってテーブルに広げ、そこからマフと小物を組み合わせる。次々にマフが完成していく様子は、分担作業の最たるもので圧巻。新たに編む人も、さまざまなナラティブを頭に描き、イメージを膨らませながら配色を考え楽しんでいる (幸せホルモン「ドーパミン」の放出!)。

マフの魅力

マフを編み始めた時、まず「Myマフ」を編みたいと思った。完成したマフに手を入れた時、指先の暖かさと共に、何か漠然とした安心感があつた。雑事に追われる日々、1日の終わりにマフに手を通し、瞑想するひと時に使ってみたい。好きな色、心が落ち着く色を選んでただ今製作中。「マフを使った知らない誰かが笑顔になってくれる」それだけで私も笑顔になれ、幸せである。

今後、編んでみたい・工夫したいマフ

現在、訪問Dr.から依頼を受けている。その人の様子、状況を伺い、喜んでもらえそうな物を工夫したい。ある日、認知症カフェで、認知症本人がマフに手を通し「これ、家で夫の言葉にイライラした時にいいかも」と話していた。さっそく本人の好きな色や猫を飼っていることを知り、家で穏やかに過ごせるようにと、猫付きマフを製作した。

マフを活用する側との連携の希望

現在、連携の希望はない。編みためたマフは、地域のデイサービスや高齢者施設、認知症カフェなどで実際に活用していただき、その変化や様子をまとめたい。

マフとの出会い

朝日新聞厚生文化事業団によって掲載された令和4年7月の紹介記事から、自分でマフを作成し、生徒に見せた時の第一声は「かわいい♡」。令和4年9月から部活動の中で生徒と一緒に取り組み始めた。

経過

令和4年9月から、静岡県立富岳館高等学校ボランティア部、及び、こども地域福祉系列福祉コースの生徒により、マフの作成、朝日新聞厚生文化事業団マフワークショップ受講、地域への紹介や寄付を進めてきた。富士宮市役所福祉企画課のバックアップで開催している認知症カフェでマフの紹介・新聞掲載や認知症サポーターキャラバンメイトがマフ作成に参加するなど広がりを見せている。



富岳館高校ボランティア部

現在の活動状況

ボランティア部の活動として週に2回、作成を続けている。マフの依頼に応じて、作りためたマフを寄付している。生徒が施設にマフをお持ちしてデイサービスでマフを活用している場面を観察させてもらっている。寄付したマフは合計50個。

マフの魅力

自分の編んだマフが癒しとなることを再確認した。学校で取り組む魅力は、生徒ができる地域貢献活動であること、生徒が認知症理解を深めるきっかけになり、生徒がそれぞれの社会資源がエネルギーに繋がる様子を体感でき、またそこに参加できる醍醐味がある。マフの作成・普及を、「高校生によるソーシャルアクション」と位置付けて取り組んでいる。

今後、編んでみたい・工夫したいマフ

その人の個性性を尊重した、その方だけのマフを作りたい。本体の長編み、花、マスコットなどの分業により、進めていきたい。現場からのフィードバックを得て、必要とされるマフを作成したい。

マフを活用する側との連携の希望

使う方の好みや趣味を反映したマフを作るには、施設・病院の職員との理解や協力、作り手との連携が必要。作り手と実際に使う人が繋がると、より一層、マフのマッチングの可能性が上がり、活動の価値が高まる。

マフとの出会い

ライフデザイン科セラピーコース2年生が朝日新聞厚生文化事業団の主催する「認知症フレンドリーキッズ講座」を受講。その講座の中で「認知症マフ」を紹介された。セラピーコースでは地域の包括支援センターと連携しながら、植物を介在として園芸福祉を取り入れた認知症カフェを学校の教室にて開催してきた。認知症カフェは5年目、新たな取り組みとして認知症マフの製作と普及を始めた。



認知症マフ普及活動チーム“そわん”

経過

認知症マフの製作のワークショップに参加したが、高校生が毛糸を編んでマフにするには難しいため、認知症カフェの見学に来た隣の認知症カフェボランティアの方々にマフ本体を編むようお願いをした。完成したマフの活用については既に病院で使い始めている看護師やこれから在宅介護で使っていく行政の方と連携した。この認知症マフ普及活動チームの名称をフランス語で“お世話する”“介護する”から「そわん」とした。

現在の活動状況

マフの本体作成は認知症カフェ運営ボランティアと参加者が担い、フェルトで作ったマスコットや飾りをつけて完成させるのを高校生が担っている。マフの活用や導入について病院や在宅介護の現場で使うことができるように看護師や地域包括支援センターのスタッフ等、連携の輪を作って進めている。特に在宅介護で安心、安全に使うことができるように検討し、試行錯誤しながらマフの製作・普及活動を行っている。

マフの魅力

マフの製作と普及について生徒と一緒に取り組む中で、いろいろな方との出会いがあった。また地域の方とも繋がることで、認知症についてより深く考えることができた。高校生にとって地域に出ていくことで、学校の中では学ぶことができないより多くのことを得ることができた。

今後、編んでみたい・工夫したいマフ

高校生がマフ本体を編むことはなかなか難しいので、フェルトを使った飾りやマスコットを中心に作っている。可愛いものから昔懐かしい物など毛糸よりもフェルトの方が再現力があり、また高校生をはじめ、誰にでもできるのではないかと。その人の好みや嗜好に合わせると、より親しみやすいマフになるのではないかと。

マフを活用する側との連携の希望

活用して頂く側のフィードバックなどがスムーズにできると良い。また楽しいと思う活動であったり、息切れしないように無理のないように進めて行くことが持続可能な活動に繋がる。

グループ 8

つるおかオレンジサポートの会 通称:つるオレ

(五十嵐利恵)

マフとの出会い

荘内病院の認知症看護認定看護師、富樫千代美氏からの2022年8月度鶴岡市認知症キャラバン・メイトフォローアップ研修会での報告でマフを知った。私自身、荘内病院勤務の時に認知症患者との関わりの中で、身体拘束について嫌な思いがあった。マフを活用した患者が身体拘束軽減されたという結果を知り感動、協力したいと思った。



経過

つるおかオレンジサポートの会(2017. 6. 29設立)は認知症の人と家族を支える市民有志のボランティア団体である。私が荘内病院を退職後に長寿介護課に認知症地域支援推進員で配属になった2016年に**キャラバン・メイトフォローアップ研修会**で市民に呼びかけ、発足した。推進員を退職後もつるオレ会員として活動を続け、現在に至っている。



現在の活動状況

作ったマフを荘内病院に持参し、患者に実際使用しても大丈夫なのか富樫千代美氏と数回やりとりをして、メンバーに情報を伝えてきた。現在、コミュニティーセンターで編み会を6回開催。初めは大変だったが、最近では月に一度定期開催、10~12時に開催している(参加人数は10~15人程)。定期開催ができ、嬉しい。

編み会の以外の活動

- 病院から事故につながる危険なマフの情報をもらい、「作成注意事項」を作成し周知している。
- 病院で使えないマフでも、施設やホーム、また個人で使える場合もあるため注意事項を知らせた上で進呈している。
- 施設にはアンケート配布しその結果をまとめ、作成してくれる方に随時還元していく計画(アンケート配布中)。
- マフ作成に携わっている方の喜び、楽しみを持ち続けて頂く配慮をしている。
- 資料作りでは、みんなが理解できるように工夫をしている。 ●定期的なマフの病院への寄付

マフの魅力

何はともあれ身体拘束具の使用が軽減してもらえれば嬉しい。カラフルできれい、暖かくてほんわか、ゆっくりする感じが好きである。道で意識を失っていた市民の方を助け救急車を呼んだ際にはその救急車にマフがあり、嬉しかった(鶴岡市の取り組みが素晴らしい)。つるオレはマフを作成したいと思う人たちの集まりなので、分からないことを聞いたり、教え合ったりして、コミュニティーの場を作ってくれる魅力もある。

グループ 9

鶴岡市立荘内病院

(原田あけみ)

マフとの出会い

認知症マフとの出会いは、2021年12月。看護部長室に、認知症看護認定看護師の富樫千代美氏が身体拘束を減らせるかもしれないとネコ型のマフを持ってきた。かわいらしいマフに手を入れてみると、楽しい気持ちになり心が癒された。身体拘束を減らせる可能性があるならぜひ取り入れてみたいと考え導入を決めた。



経過

2021年12月、数名の看護師が手編みのマフを作成した。ひとつの病棟で試験的にマフを使ってもらうと、実際に身体拘束を回避できたために徐々に活用病棟を増やした。マフが足りないと看護部有志の手芸部からスタートしたマフ作成は、医事課のスタッフや総務課のスタッフ、集中治療センターや認知症ケアチームスタッフ以外の看護師、そしてその家族など、徐々に協力者が増えた。また、鶴岡市内で開催された認知症研修会や認知症カフェで紹介したところ、地域住民にもマフの存在が知られるようになった。行政との認知症施策会議でも鶴岡市との連携が強化され「**マフ運用システム会議**」が開催された。介護課では、市内のボランティアの協力を得て、マフづくりが地域を巻き込んだ活動へと広がった。

現在の活動状況

2021年12月から導入を始めた認知症マフの活用は、2023年6月28日現在、入院患者207名、外来患者2名へと拡大。身体拘束率は、マフ導入時点の2021年12月12.5%(院内認知症ケアチーム介入患者データ)から2022年3月末には8.9%まで減少。マフ活用数の増加に伴いスタッフが使いたい時にいつでも使えるように病院内にマフ置き場を設置した。マフの作成は、地域ボランティア(ボランティアセンター・オレンジサポートの会)などから1~2ヶ月に1回寄付など地域の協力を頂いた。また、救急車で搬送される患者にも2023年1月よりマフを活用できるように市内の救急車に常備、これまで10名の救急搬送の方に入院前早期から活用されている。

マフの魅力

マフを作成するスタッフは、作成することで自分も癒されている。マフを見ているだけでも笑顔になれ、何より患者さんへの声掛けやケアが広がる。そして、自分が作ったマフで、患者さんが喜んでくれる、身体拘束軽減に繋がる、認知症の患者さんが**その人らしく過ごせるお手伝いができることは大きな魅力**である。

♥ マフを活用したケアも地域ケアシステムに発展させるために -----

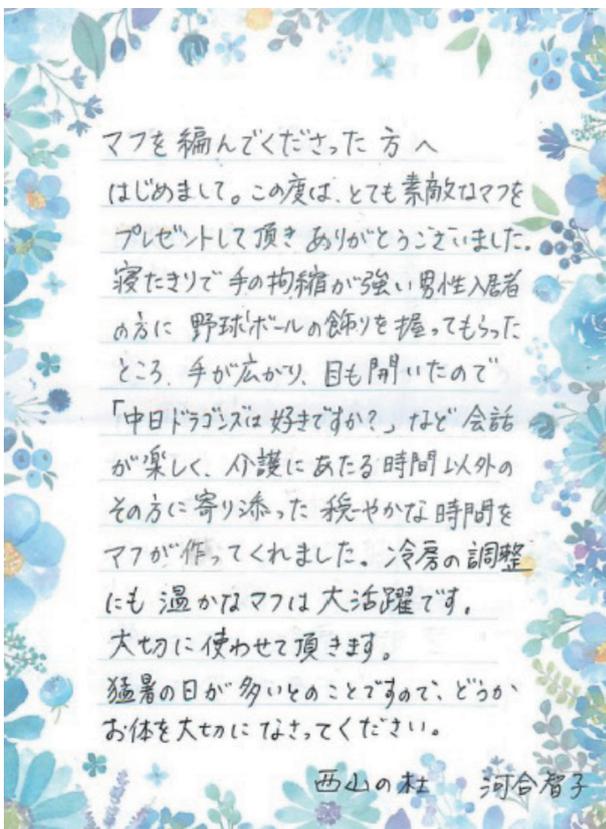
★スタッフにマフ作成を依頼する

編み物好きな看護師、介護職、医師、理学療法士・作業療法士がマフを作成している施設もあります。専門職が作成するメリットは、活用する人の特徴を良く知り、障害や好みに合わせたマフを作成できることです。スタッフがマフを編むことで、編む人の癒しの時間になります。活用する人に対して少しでも回復してほしいという思いが込められ、活用の実際や効果もわかります。さらにマフの効果を直接に把握でき、認知症ケアを創造することの喜びを体験できます。専門職としてのやりがいにもつながります。

★ボランティアグループにマフ作成を依頼する

ボランティアグループにマフの作成を依頼することもできます。編み物好きな人・介護の経験のある人を中心にマフ作成のグループが作られている地域もあります。毛糸を編むことは、編む人の癒しの時間にもなります。また、マフを活用する人が少しでも回復して欲しいと願いを込めて、マフをつくる時間はとても充実していると皆さんおっしゃいます。ストレスにならないように焦らずにできる範囲で、マフの本体を作成する人、にぎにぎボールや毛糸玉、アクセサリーを作成する人など、できる範囲で分担するとよいでしょう。また、作成された方へのフィードバックがとても重要です。

マフを作成された方へのお礼の手紙 ドラゴンズ野球ボールのマフをプレゼントして下さった方へ



西山の杜からケアマフを編む会へのお礼の手紙

- マフを使用したスタッフから、マフを編んだ方へのお礼のお手紙です。マフを使用した高齢者のご様子やマフを使用した変化が書かれていると、編み手にとって何より嬉しいことです。
- マフを寄付されたスタッフは、ぜひ、少しでもどのように活用されたのか、お手紙や直接お会いしてフィードバックするとさらに魅力的・効果的なマフの開発につながります。
- マフを編む人の励みになります。



一歩の会の作品

★マフを中心とした癒しのネットワーク

浜松医科大学附属病院で活用しているマフはボランティアグループ“一歩の会”が制作しており、市民の皆様が認知症ケアに貢献することで、生きがい作りとなる“病院と市民を結ぶ癒しのネットワーク”が広がっています。今後、マフを中心としたネットワークに地域包括支援センターを巻き込むことで、さらに市民が参加する地域ケアシステムの構築の推進につながることでしょう。2023年6月に認知症基本法が制定されました。今後、認知症の本人の視点を重視したケアの促進が社会的に求められており、認知症ケアの質の向上や認知症に対する適切な理解を深めるためにも、マフの活用が重要な役割を果たすことが期待されています。

制作・編集・執筆 浜松医科大学 鈴木みずえ

※ご意見や感想等、下記の鈴木みずえのメールアドレスまでお送りください。

※現在、マフの効果について研究中です。本ケアガイドの内容は、今後、更新する可能性があります。

ご自身の工夫の報告や最新版のお問い合わせ、ご質問等についてもご連絡ください。

連絡先(鈴木みずえ) E-mail: m~suzuki@hama-med.ac.jp

発行日: 2023年9月21日